

目次	第11回大会（筑波大学，2012年7月14 - 15日）報告（その2）／	
	松井 敏也	441
	会務報告	444
	会誌 <i>Lichenology</i> ，英文要旨のウェブ公開始まる／原田 浩	444

第11回大会（筑波大学，2012年7月14-15日）報告（その2）*

Report of the JSL 11th Annual Meeting at Tsukuba, 14 - 15 July 2012, part 2/ by Matsui T.

>>>>> 松井 敏也（大会実行委員長，筑波大学）

7月15日

午前中の一般講演では，10件の発表が行われた。中盤までは分類学に関する内容が主であり，後半は地衣類の実際的な利用を目指した内容であった。最初に千葉県立中央博物館の原田氏が，ライフワークとして研究を進めてこられている淡水生地衣類の分類体系について講演があった。今回の発表ではマルミゴケ属とマルゴケ属についてご説明されたが，マルゴケ属は生葉上地衣としても良く知られているグループであり，水際の岩石と生きている植物の葉が生育基物としてどのような共通性があるのか気になるところである。次に千葉県立中央博物館研究員の坂田氏，松井氏，高橋氏からそれぞれ，海岸生リトマスゴケ科地衣類，熱帯性地衣類の *Malcolmiella* 属，淡水生地衣類のツブノリ科の分類学

的検討についての発表があった。日本の地衣類の分類学には未検討の分類群が多数あるため，市民研究員の方々のより一層の活躍が期待される。岐阜県大垣東高校の日比野氏が，大垣東高校による岐阜県西濃地域の地衣類分布相の調査の一環として，養老町の養老公園で行った調査結果について発表を行った。イワタケなどの食べられる地衣類に興味を持っているとのことであったので，将来，地衣類の研究の道に進んでいただければと思う次第である。さらに，岐阜大学の川上氏が web サイト教材「進化する地衣類図鑑」の作成状況について発表された。岐阜県内の高校生と連携して進めているこの科学教育プログラムに掲載された地衣類は150属，300種を超える。この後は，地衣類の利用を目指した内容の発表に移る。

秋田県立大学の加藤氏が，癌細胞の転移を阻害する地衣類のスクリーニングを行い，ゴンゲンゴケのエキス

* 118号より続く



図 1. 松井宏明氏の発表。

から特に高い活性が示されたことを発表された。韓国の順天（Suncheon）大学の Hur 氏が、糖尿病の治療薬として α -グルコシダーゼ阻害活性成分を培養地衣菌から探索して、その結果シタロンという成分を同定したことの報告があった。さらに、順天大学の Jeong 氏が、コアカミゴケにおける地衣成分の生合成遺伝子の配列や発現制御について解析した結果を発表された。午前の最後には、秋田県立大学の吉谷氏が、地衣類を再合成させた際の観察および培養条件の検討についての発表があった。いったん分離した地衣菌と共生藻に再び共生関係を結ばせる「再合成」は、地衣類の重要な本質である「共生」に関連しており、昼休みにすれ込んだ質疑応答では多くの質問が挙がった。

午後には、多岐にわたる内容の 11 件の発表が行われた。筑波大学の河崎氏が、地衣類が着生した文化遺産の漆喰塗りの壁におけるカルシウム分布の変化について発表し、地衣類の着生によって漆喰のシュウ酸カルシウムが溶解して化学的劣化が起ってしまう可能性を示した。次に、横浜国立大学の中島氏が、銅汚染環境を

好んで生育する蘚苔類のホンモンシゴケと共存していたヒメジョウゴゴケやヤマトキゴケなどの地衣類を調べたところ銅の蓄積が認められ、クロロフィル濃度の比較から銅ストレスを受けていることが明らかになったと報告された。地衣類は古くから大気汚染などの指標生物として用いられてきたが、新たに金属汚染の指標にもなりうる可能性が示された。秋田県立大学の小林氏は、培養地衣菌へのガンマ線照射による育種を目指した研究の一環として、各照射条件における培養地衣菌の増殖への影響についての発表であった。山形大学の高橋氏は模擬宇宙環境に地衣類を曝した後の生存や光合成などの生理活性への影響から、将来的にテラフォーミングに用いることのできる地衣類を選別した研究について講演された。国立極地研究所の小杉氏は、地衣類が南極や砂漠などの極限環境にも生息できることを可能にしている理由の 1 つである光阻害軽減機構について発表された。地衣菌が産生するアラビトールという糖類と表層の紫外線吸収物質が大きく関与していることが明らかになったとのことである。その次には、関西大学の河原



図2. 東千葉美氏の発表.

氏と東氏が、ムシゴケ地衣菌の液体培養における、液中に分泌された β -グルカナーゼの役割や地衣成分の添加による生育速度や菌体表層タンパク質への影響についての発表を行った。午前中の発表にもあったように地衣類は有用な生理活性物質を数多く生産するが、極めて遅い生育速度が律速となり、ほとんど実用化には至っていない。そのため、培養地衣菌の生育速度を向上させることを目的としたこれらの研究には熱心な質問が相次いだ。タイの Ramkhamhaeng 大学の Sangvichien 氏も、熱帯性地衣類 *Trypethelium eluteriae* の共生菌の最適培養条件の検討について発表された。固体培養と液体培養の両方について検討し、液体培養では共生菌のスポンジへの固定や断続的な攪拌、通気条件などを試験し、その結果二次代謝産物の生産量が向上したとのことである。午後の終盤には、明治薬科大学による、地衣成分の新たな分析法の提案に関するご講演が行われた。岡

田氏は、水などの抽出溶媒に難溶性の多糖類を分析する方法として固体 NMR について、学会長の高橋氏は地衣多糖体への MALDI-TOF-MS 法の適用について、木下氏は薄層クロマトグラフィー法と MALDI-TOF-MS 法を組み合わせた TLC-MALDI 法によってヤグラゴケから新規成分を発見した、と講演された。

今大会では発表者が伝えたい内容が多く、また活発な質疑が相次いだため、1人当たり15分の講演時間に収まりきらないこともしばしばであった。この点については、十分な発表と質疑応答が行われるべく、改善の必要があると感じた。

最後に、本大会では筑波大学世界遺産専攻保存科学研究室の学生諸子に多くの協力をいただいた。また、株式会社三啓には機器展示を行なっていただいた。ここに合せてお礼申し上げます。

会務報告

Reports of the JSL Activities

会誌 *Lichenology*, 英文要旨のウェブ公開始まる

>>> 原田 浩 (日本地衣学会編集委員長)

会誌 *Lichenology* を国際的にしていきたいという考えは学会初期からあったが、その一方で、日本の会員のために日本語のページを充実させなくてはならないという使命も背負っていた。この二つを両立させるには、日本語の論文と英語の論文を別々の雑誌にまとめ上げるというのが手取り早いのだが、2誌を維持するにはより多くの原稿が必要になることと、より多くの経費が掛かることから、現実的ではなかったし、この状況は今後もそう簡単には変わるものではないだろう。

現状の *Lichenology* は、日本語の論文はかなりの充実しているし、英語の論文もそれなりに発表されている。しかし、海外での配布部数に限りがあることから、海外に情報がいきわたっていないとの指摘を一部の会員から受けていた。そこで、「電子ジャーナル化できないか」とか、「論文をウェブ上で公開できないか」というご意見を編集委員会に対しいただき、英文要旨を公開する方向で進めるということで評議員会の了解をいただいていた。

遅くなったが、それに応える形で、ホームページ委員長の原さんのご協力を得て、学会ウェブページで英文要旨の公開が今回始まった。

英文要旨を見るには

まず学会のホームページ(1)を開く。それから上の右端にある「English」をクリックし、英語のページを開く。そこで更に右上の「Journal "Lichenology"」をクリックすると *Lichenology* の英語となる。そこいろいろな入口があるので、開いてみよう。

そういうのが面倒だという方は、Backnumber のページ(2)に入ってみよう。すると下の方に

「*Lichenology* Vol.11, No.1 (2012.8.31)」など各号の情報が表示される。これが入口となるので、クリックすると目次がでてくる。目次の「巻号ページ」が緑色で示されていれば、そこが英文要旨の入口となる。緑色で示されていない論文には英文要旨はない。

10月13日現在、9巻から11巻まで準備できたが、今後も8巻7巻と順次さかのぼって原委員長に準備を進めていただく予定である。

(1) <http://www.lichenology-jp.org/>

(2)

<http://www.lichenology-jp.org/index.php/en/journal/lich/>

●複製される方へ

本誌に掲載された著作物を複製したい方は、許諾を受けてください。詳細は本誌 102号 378ページに。

●Notice about photocopying

In order to photocopy any work from this publication, you or your organization must obtain permission. For details, see No. 102, p. 378 of this publication.

●*Newsletter from the Japanese Society for Lichenology*, no. 119, pp. 441-444; eds. Harada H. & Kinoshita K., published by *the Japanese Society for Lichenology*, 20 Oct. 2012.

発日本地衣学会ニュースレター 119号

行日：2012年 10月 20日

編集：原田 浩・木下 薫

発行者・発行所：日本地衣学会

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3-35

関西大学 化学生命工学部 生命・生物工学科

微生物工学研究室

©2012 日本地衣学会 (©2012 The Japanese Society for Lichenology)

本誌記事の著作権は日本地衣学会に属します。無断転載・無断複写等は固くお断りいたします。